國學院大學人間開発学部教育実践総合センターだより

思い草

第47号

令和７(2025)年７月４日　発行

教員の「なり手不足」問題について

学部長　太田（おおた）　直之（なおゆき）

近年の学校教育現場における最大の課題は教職志望者の減少、いわゆる「なり手不足」にあるといえます。文部科学省が毎年公開している「公立学校教員採用選考試験の実施状況」によると、近年の公立の小学校・中学校・高等学校の採用試験受験者総数は平成25年度(平成24年度実施)の180,902人をピークに毎年数千人ずつ減少し、令和6年度(令和5年度実施)には115,619人となっており、11年で65,000人も減少し、競争率は5.8倍から3.2倍へと低下しています。

この問題がニュースで報じられるとき、しばしば若者人口の減少や教職の不人気がその原因として指摘され、それも事実ではあるのですが、上述した文部科学省の発表では少し異なる要因が指摘されています。実は総受験者数の内で新卒者の数はそれほど大きく減少しておらず、同期間で小学校では17,000人から18,000人台で増減を繰り返しており、中学校では平成25年に19,322人だった受験者が令和3年に13,867人まで減少しますが、令和6年には15,451人と回復傾向が見られます。

一方で既卒者は同期間において小学校で約21,000人減、中学校で約19,600人減と大幅に減少しており、教職志望者減少の最大の要因は大学既卒者の受験者数減によるものと考えられています。つまり、新卒で教員採用試験に合格しなかった受験者の多くが教職を諦めて再受験せず、企業などに就職しているという動向を読み取ることができるでしょう。

以上を踏まえると、教員のなり手不足対策として第一に必要なのは、企業に比肩し得るだけの待遇改善であることは明らかで、今年6月には「給特法」が改正されるなど一定の改善が図られていますが、すぐに問題解決に結びつくとは思えません。一方で教員養成を担う大学としては、教職の魅力を伝えると共に、既卒者の受験を支える仕組みの構築を検討する必要があるのかもしれません。

刻々と変化する社会状況にあわせて、教職を目指して入学した学生の希望を適えるため、今後も様々な取り組みを行っていきたいと考えています。

ある日のこと

教育実践総合センター長　髙山（たかやま）　真琴（まこと）

教員採用試験まで1ヶ月あまりという日、ひとりの学生が「小論文の添削をお願いしたいのですが」と研究室にやってきました。その学生、Aさんは、本学入学当初から、学童クラブのスタッフとして小学校の放課後の時間を、また教育ボランティアとして正課の時間を子どもたちと過ごしてきました。

Aさんがその日持参した小論文のテーマは「いじめが生まれない学級づくりの方法について、いじめのメカニズムを踏まえたうえで、学年の発達段階を考慮して論じなさい」というもので、Aさんの教育観、課題解決力、「子ども」についての理解度や人間性が如実にはかれるものでした。

小論文を書くにあたり、Aさんの記憶の中には、子どもたちとの関わりで得られた多くの子どもの姿がありました。2年以上、学童クラブのスタッフとして子どもたちを見続けていると、子どもたちの日々の成長を喜ぶ一方で、成長に伴い現れてくる子どもたちの自我の表出に、困惑することもあると言います。大学1年生のころは、口癖のように「子どもたちは、本当にかわいいです！」と言っていたAさんが、3年生になった今、子どもたち一人ひとりの個を、その成長してきた過程をふまえつつ理解しようと努力している姿を見ると、子どもたちの存在こそが、Aさんを教師の道に導いているように思えるのです。

そして、私たち教員は、大学と教育現場を往復していく中で、教育の理論と実践を往還的に結び付け、自身の学びを深めながら教師として飛び立っていこうとする学生たちのスプリングボードを用意しなければと、改めて思うのです。

Aさんは、教育インターンシップを修了し、今年の秋には教育実習生、つまり「先生」としてその子どもたちの前に立つことになります。4週間の教育実習を終えたAさんが、再度同じテーマで小論文を書いたらどのような内容になるのだろうか？その内容こそが、Aさんの学びの証となるに違いない、と考えるこの頃です。

保育実習

「こどもまんなか社会」実現のために

子ども支援学科准教授　廣井（ひろい）　雄一（ゆういち）

令和５年、「こどもまんなか社会」の実現を目指し、こども家庭庁が発足しました。「こどもまんなか社会」の実現のために専門職として役割を担っているのが保育士です。

子ども支援学科の保育士資格の取得を希望する学生は、保育実習を履修することになります。保育実習には、保育所での実習の他に、保育所以外の福祉施設での実習（以下、施設実習）を行う必要があります。私は保育実習の事前指導を担当していますが、授業の初めの頃に、学生の中には、保育所で働くイメージが強いため、施設実習の必要性を疑問に感じている学生も少なくありません。保育士はすべての子どもの福祉を支える専門職です。多くの子どもの福祉に関わる施設（以下、児童福祉施設）の基準では、保育士の配置が必須となっています。

施設実習では、乳児院や児童養護施設、障害児入所施設で実習を行います。学びの特徴は大きく４つあります。１つ目は、虐待や親の精神疾患など入所の経緯を知り、多様な子どもや家庭の状況を学ぶことです。２つ目は、施設で働く心理担当職員や家庭支援専門相談員など専門職がチームで支援を行っているため、専門職の連携した支援について学ぶことです。３つ目は、児童相談所などの行政機関や学校、病院などの専門機関との関わりを知ることで、施設外の専門機関との連携を学ぶことです。４つ目は、地域の商店が協力して実施する行事に参加したり、野球観戦やアミューズメントパークへの企業からの招待に出かける様子を見たりして、地域と密接にかかわりながら生活している実態を学ぶことです。

この様に学生は施設実習で入所する子どもが施設内外の専門職、専門機関を中心に地域の中で見守られながら生活している実態を学びます。卒業生の就職先は保育・幼児教育分野を中心に福祉施設や公務員、一般企業等多様ですが、施設実習で学んだ子どもや家庭へ理解を踏まえ、「こどもまんなか社会」の実現のための役割をそれぞれの立場で担うことを期待しています。

保育実習で得た私の保育者として礎

子ども支援学科　４年　上原（うえはら）　一紗（かずさ）

人生初の保育所での実習では、２回の部分実習を行わせていただきました。実際に子どもたちの前に立つことで、参観だけでは気づけなかった私自身の技術と保育者の間に存在する大きな差を痛感し、保育者の「技量」ばかりに意識が向いてしまいました。「技量は後からついてくるもの。まずは目の前の子どもを見てみよう」と保育者から助言をいただきました。この言葉を胸に臨んだ２回目の部分実習では、子どもたち一人ひとりに焦点を当てました。すると、子どもたちが心から楽しんでいる様子が分かり、私自身もその楽しさに引き込まれました。そして、私の楽しさが子どもたちに伝わり、さらに生き生きとする相乗効果が生まれたのです。この経験を通して、保育者としての専門的な技術や知識はもちろん重要ですが、それ以上に「目の前の子どもの姿を捉えることこそが、保育の出発点である」ということを学びました。

次に、障がい者支援施設（生活介護）という 18 歳以上の障がい者を対象に日中の介護や創作・生産活動の機会を提供する施設での実習で、職員の方から「利用者は体が小さいわけではないので、職員が物理的に利用者を動かすことはできない。だからこそ、利用者の意思を尊重し、納得して行動してもらえるよう工夫している」というお話を伺いました。言葉でのコミュニケーションが難しい利用者に対しても、職員の方々が視覚的なアプローチを駆使して関わる姿は印象的でした。この観察を通じて、私の中に「子どもたちに対しても、同様の配慮が必要なのではないか」という意識が芽生えました。それ以来、子どもと接する際には、安易に「抱っこ」といった物理的な手段に頼るのではなく、自律性を促すような関わり方を意識するようになりました。

このように実習での全ての経験は、私にとってかけがえのない糧となっています。来年４月から保育者として働く上で、この学びを忘れず、理想の保育者像に向けて日々精進していきます。

教育インターンシップ

憧れの職業に向かって

初等教育学科　３年　榊原（さかきばら）　千夏（ちなつ）

私は、教育インターンシップを通し、実際に現場の先生方や児童と関わることで、教師として働きたいという思いが更に強くなりました。幼い頃から教師の職業に憧れを持っていた私にとって、先生方の姿を見ること、児童と一緒に勉強し、触れ合うことは毎回新鮮な経験でした。長期的に関わりから様々な変化を感じ、学びを得ることができました。

まず、先生方との関わりでは、児童への向き合い方や授業を間近で見てお話させていただき、日々の生活の中に、沢山の工夫があることに気づきました。特に、児童のよさを引き出す声かけが、印象に残りました。例えば、特別支援学級の何度も机を叩く児童が、１週間後には、見て！と目を輝かせて、手を膝に置いて良い姿勢で座る姿を見せてくれました。また机を叩いてしまっても、その児童のよさを認め、粘り強く向き合う先生の姿から、教師は人を育てるプロだと改めて感じました。

次に、児童との関わりでは、児童が輝ける場面が溢れ、発達段階に応じて多様な姿を見ることができました。その輝きを引き出すのが教師の役目だと学び、多角的な視点で関われる教師でありたいと感じました。特に印象に残ったのは、児童が自分の行動について自分自身と葛藤する姿です。また同じことを繰り返してしまいそうになった時、児童自身で立ち止まる姿がありました。その姿が、私には輝いて見えました。児童との対話を大切に、成長を支援していきたいです。

そして、私自身の児童との向き合い方も変化しました。関わった当初、児童の言動に対し、困惑したことがありました。そんな時に、先生から助言をいただき、先生方の関わり方を見てまねることを実践しました。この経験を積み重ね、困惑だったものが、新しい一面を見れたという学びとなりました。私は、今はまねる段階ですが、将来、自分の力として発揮され、子どもと向き合い続ける教師になれるよう、この環境や周囲の方々への感謝を忘れず、これからも学び続けていきます。

教育インターンシップに行って良かったこと

健康体育学科　３年　岩永（いわなが）　凜綺（りんき）

私は、大学２年生の６月から１月の間、教育インターンシップとして週に一回、横浜市立美しが丘中学校に行きました。生徒と一緒に体育の授業に参加をしたり、保健・道徳の授業を見学したりと実際の教育現場に携わることができました。またコーチとしてバスケットボール部の練習、試合にも関わらせていただきました。

教育インターンシップに行って良かったと思う主な理由は、生徒と関わることによって授業のイメージが立てやすくなり、教育実習や大学の教職系の授業において役立つ知識やスキルが増えたことです。大学の授業では指導案を作成したり模擬授業を実践したりなど、実際の学校現場に求められる指導力を高めるために取り組んでいることが多いです。しかし、模擬授業では大学生を相手とするため思うように会話が弾まなかったり、生徒の反応を予測するのが難しかったりと実際の学校現場の様子をイメージすることが困難でした。そんな中で教育インターンシップに行ってみると、実際に子供たちが活発に活動している様子や積極的に意見交換をしている姿を見て、私が想像していた以上に体育の授業を楽しんでいることがわかりました。さらに、実際に子供たちと関わることによって、教員の楽しさに触れ、授業づくりの工夫を見つけることができます。大学にいるだけでは経験できない新たな学びを得ることで、教職科目の授業をより実感を持って受講できるようになりました。また部活動では普段の授業で見ることのできない生徒の真剣な姿に心を奪われ、一緒に練習をしたり、夏休みに試合を見学したりと今だからこそできる経験をたくさんさせていただきました。

以上のことから教育現場に行くことによって、新たな学びを大学や教育実習で生かすことができるのはもちろん、今しかできない体験をすることもできる貴重な機会でもあるため、教育実習に不安を抱えている人や教員になろうか迷っている人はぜひ、教育インターンシップに行ってみてください。

教育インターンシップ連絡協議会・報告会

経験からの学びを生かす

令和７年１月 23 日（木）、令和６年度教育インターンシップ連絡協議会・報告会を対面で開催いたしました。全体会では結城孝治副学部長から、教育実習前の経験としての教育インターンシップの意義と学生への指導に対して、受入れ校・園へお礼の言葉がありました。

その後、令和６年度教育インターンシップの実施状況の報告に引き続き、学生の実習報告と学校や幼児教育施設の先生方からの実施状況報告がありました。幼稚園実習について子ども支援学科２年の吉田理香子さん、小学校実習について初等教育学科２年の渡邉珠怜さん、中学校実習について健康体育学科２年の杉本光さんが教育インターンシップの経験や学びをもとに報告しました。また各園や学校の実施状況について、横浜市立さつきが丘小学校長の仲川由佳理先生、横浜市立あざみの中学校副校長の齋藤法子先生、世田谷区立認定こども園多聞幼稚園長の山路智之先生から学生の実習の様子や今後学生に期待することなどのお話をいただきました。

そして第２部では、受入れ校・園の多くの先生方にご参加いただき、校種別に分かれた分科会を行い、「教育インターンシップの経験を教育実習にどう生かすか」のテーマのもと、先生方からのアドバイスを参考に活発な意見交換を通して課題や目標を明確にし、学びを深めることができました。

第16回夏季教育講座 教育実践フォーラムのお知らせ

テーマ

『主体的に学びに向かう子どもの育成
～探究的な学びを実現する
授業・活動のデザイン～』

日　時　令和７年７月 27 日（日）
13：00 ～ 17：00

会　場　國學院大學たまプラーザキャンパス

内　容

◆全体会　基調講演

◆分科会　①保育・幼児教育　②言葉・国語
③音楽　④体育・保健体育
⑤総合的な学習の時間　⑥道徳
⑦特別活動　⑧特別支援教育

申し込み　教育実践総合センター
國學院大學　教育実践総合センターホームページ・チラシの申し込みフォームより申し込んでください。（７月 24 日まで）

教育インターンシップ連絡協議会

日　時

第１回　令和７年７月８日（火）
第２回　令和８年１月 21 日（水）

会　場　第１回はオンライン
第２回は対面で開催
國學院大學たまプラーザキャンパス

内　容　教育インターンシップをよりよい活動や学びにするために受け入れてくださっている学校・園・施設の方々と活動の様子について情報交換・意見交換を図る。

今年度のスタッフ

◆教育実践総合センター
センター長　**髙山真琴**
副センター長　**山田佳弘**
担　　当　**小笠原優子　井田　均　岩城眞佐子**

國學院大學人間開発学部教育実践総合センター
〒 225-0003　横浜市青葉区新石川 3-22-1
電話：045-910-3760　fax：045-910-3756